

# 絵本から学ぶ人権教育

所用時間

90分

対象

小学校高学年以上

## ねらい

- 絵本の中に織り込まれている人権テーマをクローズアップしてワークショップを行う。異質排除をせず、違いを認め合っていくことの大切さを学ぶ。また、自尊感情や自己有用感の大切さに気づくことができる。

## 準備

絵本「森の大きな女の子」レナーテ・ゼーリッヒ（絵）エヴェリン・ハスラー（文）服部いつみ（訳）セーラー出版  
ワークシート「絵本『森の大きな女の子』を読んで」（個人用・グループ用）  
資料「身体差別 ありのままを認める社会を」（デイ多佳子）  
筆記用具（個人）

## 進め方

導入

10分

- 1 アイスペイクを行い、グループを作ります。
  - ファシリテーターも参加するとよいでしょう。
  - 1つのグループが4～5人になるようにします。

展開

65分

- 2 絵本の朗読をファシリテーターが行います。（誰かに読んでもらったり、交代で読んでよいでしょう。）（10分）
  - 絵本はグループに一冊用意できるといいのですが、ない場合は、絵本をプロジェクターで映し出して参加者が見えるように工夫しましょう。
- 3 ワークシート【個人用】の①・②に感想を記入します。（5分）
- 4 グループ内で感想を発表し合います。その後各グループの代表者が発表します。（20分）

発問：「それでは感想を発表し合って、その後自由に意見交換してみてください。後で簡単に発表していただくので、代表の方を決めておいてください。」

  - グループの代表者に、どのような意見が出たか発表してもらいます。
  - 発表後、質疑応答の時間をとります。
- 5 ワークシート「ねえほらあの人を見て・・・」を行います。（5分）

発問：「それでは次にこのワークシートをやってみます。」

  - ワークシートを配布し、内容の説明をします。

展開

- 6 もし、自分が保護者だったらどう答えるか記入します。(5分)
- 7 グループごとに意見交換をします。その後グループの代表者が発表します。(20分)  
発問：「それでは意見交換をしてください。そして先程と同じ様に後で発表してもらうので、代表の方を決めておいてください。」
  - グループの代表者に、どのような意見が出たか発表してもらいます。
  - 発表後、質疑応答の時間をとります。

振り返り  
15分

- 8 各自感想を記入し、何人かに発表してもらいます。
  - 学習を通して、気づいたこと、考えたこと等を振り返り発表し合います。
- 9 最後に資料「身体差別 ありのままを認める社会を」を読んで終了とします。

## 留意点

- 絵本「森の大きな女の子」については絵・文をここに掲載することはできないので、図書館で借りていただくことになります。
- 絵本はグループの数用意します。冊数がない場合には、作品をコピーして使用してください。(出版社には了解はとってありますが、一応事前に確認していただくとういと思います。) 終了後は回収してください。(現在この本は絶版となっています。) プロジェクターで投影できるように準備しておいてもいいです。
- 絵本については人権のテーマが含まれていれば応用できます。今回の「森の大きな女の子」はひとつの例です。よい絵本がみつければ、ワークショップの内容はファシリテーターが自ら実態に合わせて考え、シートも新たに作成してください。人権の視点で絵本を見ていくと、いろいろなテーマがみつけれられます。

ワークシート【個人用】

**絵本「森の大きな女の子」を読んで** 氏名

---

- ① この話の中で「問題だな」と思ったところを書いてください。

- ② この話の中で「よかったな」と思ったところを書いてください。

- ◆ グループで発表し合ってみよう。


- ◆ 各グループごとの発表  
聞いて思ったこと（メモ）

ワークシート 【グループ用】

**絵本「森の大きな女の子」を読んで**

---

- ① この話の中で「問題だな」と思ったところはどこですか。



- ② この話の中で「よかったな」と思ったところはどこですか。



- ◆ それぞれ発表しましょう。

ワークシート

**「ねえ ほら あの人 見て・・・」** 氏名

---

**「ねえ、ほら あの人 見て お母さん。大きい女の人が・・・」**

やっぱり娘が尋ねてきた。向こうから身長が180センチ以上はありそうな女の人が歩いてきた。じっと娘が見ていたので、きっと聞いてくるかなと思っていたところだった。

**「ねえ、お母さん、あんなに大きな女の人みたことないよ。ねえ、お母さん」**

娘は、大きな女の人をじっと見ながら聞いてくる。

その女の方は、なんとなく自信なさそうに、他の人の視線を避けるように歩いてきた。どう言ったらいいのだろう。

☆ あなたがこの母親（保護者）ならば、ここでどう答えますか。考えてみましょう。

◆ グループで話し合ってみましょう。

◆ グループごとに発表しましょう。

☆ 感想を書きましょう。

## 資料

「身体差別 ありのままを認める社会を」(2008 10.30 朝日新聞より)  
トールクラブひまわりの会 世話人 米大学勤務 米国在住  
デイ多佳子

最近、日本で「ウォーキン☆バタフライ」という背の高い若い女性を主人公にしたテレビドラマが放映された。深夜番組で視聴率は定かではないが、私たち「トールクラブひまわりの会」(会員15人)にとって画期的な出来事だった。

会は、私が05年に出した「大きい女の存在証明」(彩流社)という本に感想を寄せてくださった身長170センチ以上の女性たちと立ち上げ、意見交換を目的としている。会で得た共通認識は、「デカイ」と言われて、女性たちが長年心を痛めてきたことに、世間の大半の人は気づいていない、である。ドラマは、私たちの日常の一コマである身体差別を正面から取り上げた。

ドラマは、ガリバーとあだ名される主人公に投げつけられるセクハラまがいの言葉や主人公のせりふから綿密な取材がなされたことは明白だ。その意味で、好感が持てたが、背の高い女性への理解が深まるかと言えば、非常に疑問である。というのもドラマは「見返してやる」「勝つ」を前面に出す“スポ魂”を貫いているからである。

主人公の、モデルになるという夢の実現、「居場所」探し、「私らしさ」を求めてひたすらがんばれというメッセージ。そこからは、他者の痛みへの共感や、誰もが生きやすい社会をめざす外向きの視点やエネルギーは完全に排除されている。

「居場所」とは、ありのままの自分がそのまま受け入れられているという安心感がある場所のことである。社会とは、それを構成する私たちすべての居場所でなければならない。人に会うたびに「相変わらず大きいね」「身長何センチ」式の絶え間ない身体への言及は、私たちをたまらなく不安にする。

私が暮らすアメリカでも、男は女より背が高く、というイメージがあり、背の高い女性たちは悩む。「トールクラブ」は隣国カナダを含め65以上もあり、男女会員は4千人を超える。最初のクラブが結成されたのは70年前。会員同士、悩みや経験を打ち明け、親交を深め、全米のクラブ代表が参加したコンテスト「ミス・トール・インターナショナル」を開いたりして社会的理解を深める活動をしている。確かにアメリカも人種差別など根深い問題を抱えているが、面と向かっての身体の言及は侮辱とする意識は高い。

街で、見知らぬ人に「デカイなあ」と声をかけられる日本の社会環境。人に揶揄されても絶対に逃げられない自分の身体。それらとともに、たった1度の人生にどう向き合うか。私は「劣等感につぶされるのも勝つのも、自分次第」と、自己向上をはかる個人的な努力を否定するものではまったくない。

しかし、人は社会的存在でもある。なぜ、背の高い女性は劣等感を持たされるのか。なぜ、心で泣いているのに、自虐で笑いをとり、悩んでないふりをしなければならないのか。

「自分が勝つ」という内向きのエネルギーは、閉塞的な社会を生き延びる処世術に過ぎず、悩みの再生産は止められない。

会は、次世代の背の高い少女たちに、私たちが通った同じ悩みを背負わせることのない社会をめざしている。

身長のみならず、体形・外見への言及・暴言は、誰しものが経験していよう。が、それらが差別心、人格無視の表れであることも多い。言われ続けるトラウマは、その人の一生を縛ってしまう。誰もがありのままの自分に安心できる優しい開かれた社会の誕生を心から望んでいる。